
ghosta city ((ゴーストシティ))

零夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ghost city（「ゴーストシティ」）

【著者名】

NZノード

【作者名】 零夜

【あらすじ】
過去に人を殺し。
殺された一人の男が居た。
死んだ後と言うものは、普通は、あの世のはずだが。
どう言う訳か。普通に暮らせてる。
地図に存在しない町。「ゴーストタウン」。そこで、
少年を待ち受ける物とは、？

プロローグウ＼

俺の名前は、新川 遼。

突然だが俺は、人を一度殺し。

そして . . 地図にも存在しない町。

ゴーストシティに住むことにした。

どう言う訳か。その子を殺したと思ったら、誰が黒い服の男が立つていて。

その先は、覚えていない。

だが俺は、確実に殺された。

その子の親なのか？それとも単に入殺しがしたいだけのキチガイさんかは、分からぬ。

なぜか死んだ後もこうして暮らしているのだ。

俺は、学園に入学した。試験もいらないそうだ。

そんな怪しい所に俺は、ほいほいと入つてしまつた訳です；

クラスの奴らは、面白いが時に俺が痛い子になる；

そんな痛い俺の物語です。

過去 . . (前書き)

俺は、前から気になつてゐる子が居てさ。
告白もして。ちゃんと離してたんだ。
けどな . .

過去・

滋くん！…私達付き合って。もう。2年近くだね…」

迅「そうだな。それで？」

「キスマだつたね？」

今…して？」「

迅「え…ああ、良いよ。」

俺は、肩を抱き寄せ。

彼女の口にキスをした…

だが…最悪なことが起こつたんだ。

俺が口を離したその瞬間の出来事…

「うつ…ああ…苦しい…苦しいよ…迅…くん。」

彼女は、冷たい地面に倒れこむ。

迅「はつ？おい！…なんだよ…ビビったんだよ…」

黒い男「お前は…危険だな。さよなら」

迅「お前つ…！誰…う、がはあ…！」

とくとくと血が流れるのが見える。

そして、俺の目の前は、真っ赤に染まる。

ペペペペペペペペ…

迅「なんだよ…また夢か。そして、俺の静かな目覚めを邪魔する。

目覚まし時計と言つ

恐怖だな！…今日は、入学式だつたけな…だる」

俺は、だる過ぎる思いをしながら、

学校の入学式に行く。

なぜかつて？朝起きるよつ。教師に呼び出し食ひりつて。

説教つて、パターンの方が一番だるいに決まってんだろ？歩くこと、30分。

迅「ああ…だるい。まあ、すぐ終わるならいいか。」

そこに誰かが俺にぶつかる。

迅「いてつ！おいでえぞ。」

「すみません．．．急いでいるもので。では、」

迅「おいおい！！待てよ！！」

そいつの後を追い。俺は、入学式に間に合つ。

俺の名前は、新川 迅。（あらかわ じん）

入学式に遅刻ぎりぎりできた。張本人だぜ！

まあ。。校長のだるすぎる話も終わり。

その日は、その場解散だった。

そんな時、

迅「おいお前！！朝の！！」

「朝は、ごめんなさい．．．では、私そろそろ行くので。」

と、またもや勝手に帰られる。

何なんだあいつ！

お前の頭の中に味噌つめてやろうか？

俺は、朝の事を色々愚痴りながら、帰る

一人で愚痴。周りから見ればただの変な人。

まあ．．俺は、そう思われても良かつた。

この今いる世界の方がおかしいのだから。

そして、右に曲がったときの事、

「呪う．．」

迅「！？」

不意に後ろから声が飛ぶ。

迅「おいおい誰だ？人様にいきなり。不穏な言葉を投げつける奴は、

「呪うだけ．．」

迅「はあ？なんだよお前、頭のネジ何本抜けてんだ？」

「話す事などない．．」

と言つとそいつは、俺に向かつて。

殺意をあらわすかのよつ。

こつちに走つてくる。

迅「おい何だよ。こきなつ。うわあ……。」

俺は、両手で自分を守る。

もう終わりだ。

そう思つたとたん。

声がする。

「あぶないです……下がってください……。」

この声は、？

過去・・(後書き)

いきなりトラブルに巻き込まれる。迅、何も出来ない。そこに女が走ってきた。

幸仁。（前書き）

突如あらわれた。黒い者達。
それを止めに来た。暗い少女、こと。ミス ネクラは、
俺をほつといて。一人で戦い始める。
逃げた先に。あの黒い服の男がいた。

幸仁。

逃げると言われた俺」と、新川迅は、逃げる途中、少年と出会つ。

迅「ちくしょう。方向音痴といつ才能を持つ俺に、どうじぶんと……」「よう・お前も逃げてたのか。」

迅「えつ? 誰?」

「俺は、夢野 幸仁」

殺して、殺されてここに来た。

女を殺して。その後。迅雷にこうされた。「

迅「お前・女つて、神川?」

幸仁「そうだね」

迅「てめえが・あん時の犯人か・・・」

幸仁「俺も命令で動いたから、」

そんなところに。

黒い奴らが現れる。

幸仁「くそつ・逃げて!! 迅。行くぞ!! リングレバイス!!」

レビアイアス「了解」

俺は、戦う二人を背に。

あの女を助けに行く。

迅「いた!! 大丈夫か?」

「なぜ来たの・・?

こない方がいい」

リンルリ「うしろだ!!」

「くつ・・ありがとうリンルリ」

俺は、この世界に居るのに、

俺だけあの力が使えないなんてことは、あるのか?

いや、ないよな?

なら . .

迅「来い . . 僕の悪靈 . .」

「目覚めたようですね . . 私は、リーン . .

貴方の悪靈です」

「あれは、死神と恐れられている . . リーン」
リーン「私は、死神 . . 何か大切な物を失い。
死んできた者にのみ使いこなせる力です」

迅「大切な物 . . 雪野。」

リーン「では、行きますよ?

一瞬で片付けます!!

両手を上にかざして下さい」

迅「こうか?」

リーン「そうです。では、行きます

手を前に出すと。

黒い光が広がつて行き . .

飲み込む . .

リーン「全て消えましたね . .」

「どうして . .なぜ貴方がそんな力を?まさか . .

向こうで戦つていた。

少女、ネクラ系少女が、

目の前で喋る。

迅「たいせつなものを失い、死んだからな . .お前、名前は、?」
「私は、郷野 きょうの 水瑠 みづる よろしく . .」

その時、

幸仁が走つてくる。

幸仁「大丈夫?」

迅「無事、」

幸仁「俺達全員、同じクラスだから、よろしく . .俺は、恋愛関係
なら任せてほしい」

迅「水瑠 . . あいつ嘘言つてる?」

水瑠「「クン・・」

静かにうなずく。

幸仁「うつ・・じや。俺、先帰るーー！」

つづく

幸仁。（後書き）

嫌な事に巻き込まれてしまった。
迅、だが。不思議な力によつて。
難を逃れる。

だが、次はなんだ？

次回 . . いきなりの転入生。

地図には存在しない町、ゴーストシティ . . 何が消えようとも。
永遠に光を . . その町は、拒絶する。

転入生。（前書き）

俺こと。新川迅は、あの戦いの次の日、
俺は、登校していた。
そこで、転入生。
そいつの名は。

轉人生。

迅「おこおこおこおこ……俺は、今、迷つてゐる。迷つてゐるがお

そうなのだ。方向音痴という最悪的才能を持つ俺は、学校に行くのに迷っていた。

卷之三

田「学交ジニ「ジ」あ

家を出るなり。近所の人何だこいつと。冷たい視線を朝から浴び！
行き会つた。犬にいきなり噛まれたり。

おまかせ。おまかせ。おまかせ。

上から、「カーカー」と不穏な泣き声が聞こえ。

何なごと思ひ
上を見上にて

カテアの「ハン」と言へ、なんともいひない。田舎おじをいたたき!!
その上、方向音痴かよーーちくしょうーー」

一人の少女が現れる。

水曜 - おはよう。・ どうしたの?」

近藤方かし

まるで、最悪な田舎まして、時計を掛け一掛け壊し
今日は、学校だったときです。

慌てて用意をすませ

彼は・・俺の全てを、
ぴたりと当ってくれた。

ご親切に

こんな親切いらねえ！！

水瑠「大丈夫だよ・・もてないのにナルシストさを保つてる。あの
人とは、

違うから……」と、郷野 水瑠（ネクラ系・美少女、ミスネク）は、夢野 幸仁（自分は、もてないのに、ナルシストさをたもちつづける。少年を指差す）

幸仁「あさからそれは、ないだろ・・僕だって、

いは

女のメールもくらいは
「いない」

少し期待をされつゝも、自分の携帯の友達の現実にきずきながら。その少年は、言つ。

「お前、今なにげす?」
迅「お前、今なにげす?」
「…」

水瑠「うんうん・しかもて。かなり引かれる言葉を・・・」
幸仁「先に行つてくれ。・・・今日は休む・・・」
と、背中を落とすナルシは、帰つていく。

でも、下を向きすぎて前が見えていないようだ。

万里 危ない

「そこ・・電柱。」

水野「先いこ・なんだか大変そうだし」

迅
一
だ
な
・
じ
や
あ
な

「…」最悪な少年

俺は、つるわい奴をそつちで置いておあ。

学校の教室に居た。

今日は、転入生がくるらしい。

男か？女か？

と高い。好奇心多せいいの感情をいだく。
が・・周りの奴らの方がすごいかった。

まるで・・回転寿司でレールを見ながら、
まだかな・・まだかなと、前の席まで見る。
卑しき子供のようだ。

そんな時、転入生がくる。

す・・

「どうも。転入生の迅雷 芽衣華です。（じんらい めいか）」
卑しき子供達（生徒）「おおおーーかつわいいじゃん？胸でけえーー
俺のタイプだわ」

芽衣華「よろしくねっ！」

卑しき子供達（生徒）「おれ、あいつの隣だつてや。
するこぞーー裏切り者ーーかわれーーお前にま、ふさわしくないーー」

まる職おまけつきのおもむりやをかつてもいえず。
かつて、かつて。とダダをこねる子供のようだ・・

これが俺の正直な感想。

でもまた？迅雷？

確か幸仁が言っていた。

命令をした奴・・

迅「幸仁・・あいつか？」

幸仁「そのとおり。放課後呼び出す」

水瑠「あの子なの？」

幸仁「間違えない」

どうやら、あの子で決定のようだ。

俺の中で怒りが暴走する・・

でも、また？なぜここにいる？

あいつに未練なんかあるのか？
あの子も、殺されたって口か？

芽衣華「よろしくねっ？」

俺の目の前にそいつが居る。

迅「．．．ああ。よろしくな．．．人殺し．．．」

芽衣華「なんの事かな．．．分からないよ」

「みよ」

奴は、下を向きいきなり暗くなる。

絶対にあいつだと確信した。

生徒「おいおまえ！－－転入生に何言つてんだ！－－あやまれ！－－」

迅「外野は、黙つてろ！－－」

生徒「な、何だよ。変な奴だな？」

「みよ」

転入生。（後書き）

学校に転入生…すごい人気だ。

だが。俺は、そいつを好きにならない。
そして、受け入れない。

人殺しなのだから。

次回…放課後。

地図には存在しない町。ゴーストシティ…何が消えようとも。

永遠に光を拒絶する。

放課後。（前書き）

ついに、迅雷 芽衣華を発見。
いや、正しくは、転入してきたのだが。
とにかく。こんな所で、人殺しを発見してしまった俺は、
放課後にそいつを呼び出す作戦をたてた訳だが。

放課後。

迅「あいつに違いない。」

幸仁「でも、どうやって呼び出す?」

水瑠「私に。考えがある。」

と、水野は、言つ。

だがその作戦ができるだけ手荒じゃなければ良いんだが；
俺は、聞く。

迅「なあ、水瑠、それって、手荒？」

水瑠「手荒ではありますん、あの人気が帰るといひを、後ろから、捕
まえ。

使われていない教室で。じっくり話を聞くだけですか？」

迅「・・・」

手荒である。じっくり話を聞くあたりがすげ手荒である。
まあ、それで話すならいいけど、

なんだかんだあって。放課後になる。

俺は、昼の残りのあんパンを食べようとしたところ。

「おお、これは、おいしいですね」

俺の後ろに居る。死神さんにあつけなく。650円を食われたのだ。
あー、なんて不幸な。」

迅「おい、てめえ！、俺の650円返せよ。」

死神「知らないなあ」

迅「口に物を入れながら、喋るんじゃねえ！」

「おお、これが。リングジュースと言つ奴か。うまいな」

飲み終わったパックを俺に渡しながら、言う。

因みに、ジュースのは、498円だ。つまりは、この悪靈に俺は、
1148円奪われたことになる。

だが、相手は、所詮悪靈。」

財布など持つてるはずが。

死神「金なり、返しますけど?」

もつて、やがつた . . .

とりあえず俺は、

その財布から、

1148円を取ろうとしたところ。

「すみません。あんまりお金なくて、」

223円を返しやがつた . . .

迅「お前に、食べ物の恨みと畜生の物を、教えてやろう。」「

「はい?」

迅「金で返せないとおは、どうすると思ひ?~なん?」

「分かりません . . .」

迅「じゃあ、教えてやる。耳貸せよ」

「えつ?み、耳ですか?」

迅「頬を赤くリンゴのように染めるなよ。なにで返すか?それは、

(小声)「体で返すんだぜ?」「

「う、わ、わあ!~そつそんな . . .私の体ですか?」

迅「うむ。」

「え、えええ . . .」

注意、これは、幽霊と少年の物語を描いた。ハレンチものでは、け
してない!!

ない!!だんじでない!!~

これは、世間的なルールである。
かりをつくつたら、返す。

返す!!返す!!~当たり前の事である!!~!!~!!

「わ~わかりました。いつですか?」

迅「そうだな . . .今日の夜中、とか?どうよ~。」

「そ、そんな . . .」

迅「いや . . . 真に受けないでください~今、想像したけど。

かなり。俺が虚しい事になる。

だから、今度そなことしたら、

本当にA~いや・・・ゆるさねえぞ?」

「は、はい・・・」

水瑠「見つけました・・・現在。下駄箱前・・・

幸仁「そちらの状況は、?」

幸仁「こちひり、幸仁・・・ああ、歩いて来てる。じつちに。右足から、歩く

足は、その本人のきき足を意味する・・・

水瑠「それが・なにか?」

幸仁「つまり。対面したとき、右からけられる事が多いつて、とい
です。」

水瑠「了解」

幸仁「目標接近・・・通信を一度、きる。グッドラック。」

水瑠「はつ? グットラック? ブチ。あ、切れた。」

幸仁「やつほい!! 今の俺、決まってんじゃねえ? 高感度は、俺の
ものだ。」「ピピ」ふつ?」

水瑠「高感度は、貴方のものではありません・・・あなたの事を好
きでは、ないと言つ事ですね。

誤解のないよう。」では、「

幸仁「「ピッ」な、何!!--やはり俺は、高感度を物に出来ないと言
うのが!!」

僕は、俺は、私は、!!「ピッ」なんだ?」

水瑠「過剰なパロは、ご遠慮ください。では、」

幸仁「チーン・・・終わった。

あ、来たね・・・

迅雷「ふう・・・まさか、あんな形で出くわすとはね。びっくりした
よ。」

あはっ!ねえ、レクイル。

レクイル「そうだな。」

幸仁「そこを動くな・・・

迅雷「幸仁・・・何の用?」

幸仁「お前をここに地獄会に落としに来た」

迅雷「やつてみなさい？」

幸仁「遠慮しませんよ？ 来い！！ レバイアス。」

レバイアス「どう戦う？」

幸仁「まずは、攻撃の分析からだ・・・」

レバイアス「分かった」

迅雷「どこ見てるの？」

レクイル「はあ！！」

幸仁「うわあ！」

大きな大剣が。俺の肩から上を通る。

迅雷「あれ？ なーんだ。あっけない。かえろかえろ」

幸仁「おいおい。勝手に試合終了か？ 俺まだ生きてるんだけど？」

迅雷「なっ・・あの一撃をかわすなんて、いいわきなさい？」

幸仁「うおおおおおお！..」

レバイアス「食らえ・・・」

俺は、リングを相手の足あたりから、
降り始める。

幸仁「捕まえた！」

レバイアス「まだだ。」

迅雷「わお・・危なっ！.. もう少し。で、捕まえられてしまつところ。だつたわね」

レクイル「女を捕まえてどうするんだか・・・」

迅雷「こ・・じりー！ 私が誤解を招くような言葉を言わないで・・・
私、想像しちゃう。」

幸仁「地獄でも想像してろ！..」

レクイル「くつ！..」

迅雷「危ないつ！..」

もつそろそろ良いかな？ ていあ！..

上と下から、大剣が来る。

俺を串刺しにする気か？

幸仁「ぐつー！」

おれを、串刺しにして動けなくして、どうする気だ？
まさか……束縛？』

迅雷「な、何いってるの？きよ、興味なんてないよ。」

幸仁「本当かよ……」

迅雷「本当だよー！」

幸仁「まあいいか……遊ぼうぜー！人殺しー！」

迅雷「はあー！」

幸仁「はいはい危ない危ない。」

迅雷「っちー。」

なら、こいつしてやるわー！この校舎を私の物にしてあげる。
行けー！悪靈達……ここを物にしなさい。』

悪靈「うーーす」

これは、時間がかかりそうだな……

迅「おい……感じるか？」

「ええ、確かに感じます。とても嫌な感じです。」

俺は、不穏な感じがし。

水瑠に電話をかける。

迅「おい水瑠」

水瑠「状況は、分かつてる……こいつたちも悪靈が居る……」

迅「おい！今、どこに居る？」

水瑠「体育館。」

迅「待つてろー！助けに行くぜーー！」

いくぞーーー！」

「了解ーーー！」

つづく

放課後。（後書き）

いよいよ放課後戦も！！

おおずめだ！！

次回。「放課後、決着」

地図には、存在しない町、ゴーストシティ・・その町は、何が消えようとも、永遠に光を拒絶する。

放課後戦・決着（前書き）

転人生は、人殺しだった。
その転人生とのバトルは、
決着を迎える。

放課後戦・決着

幸仁「ち・・体力が」

芽衣華「もう限界なんぢやない?あきらめて串刺しになつたら?」

幸仁「あきらめるかよ!—」

芽衣華「威勢が良いね?でも現実貴方のまけよ?」

俺は、待つている。あの一人が来ることを信じて。

二階 教室廊下。

迅「ちつ・・何なんだよこの悪靈の数!—ありえねえ—よ!—

こいつ!—俺の悪靈!—」

「かなり居ますね。いけますか?」

迅「やるしかねえだろ!—」

俺は、目の前にいる敵の事を考えた。

水瑠がどこに居るかも考えずに。

ただ。方向音痴が突つ走る。

このままでは、自分を見失いそつだが。

迅「ちつ・・こつちもか!—」

「貴方・・動きが悪い。何か別のこととに頭が行つてませんか?」

迅「それどころじゃねえって、ことは、分かつてるけど。

あいつの無事が気になるんだ。」

「今は、前のことだけ考えて下さい。貴方が落ちては、意味がない」

迅「落ちる?」

「そうです・・地獄界に。地獄界に落ちたものは、永遠に。魂を取り戻すことは、出来ないそうです。いわばここは、地獄界と天界の狭間なのです。」

迅「くつ!—初めて聞いたぜそんな話。ぞつとしねえ話!—

あぶねえ!—」

俺は、悪靈の攻撃を避けながらも会話をすると宣言。無理すぎるテクを使つていて。

むしろ集中しないのは、あいつの方だとと思うが；

思いながら、俺は。エレベーターに飛び乗る。

迅「ちつ！－これで、体育館まで降りるぞ！－！」

「分かりました。」

水瑠「うつ・・・視界が歪む。もしかして。ここまで・・？」

「！」

私は、体育館の壁に飛ばされ。
もう体力がない状況。

ほとんど気力で立っている。

水瑠「まだ！－はあ！－！」

黒いものたちが増えた。

増殖する。

もう駄目らしい・・・

その時、体育館のドアが開く。

迅「みづるうううううううううううううううううううう！」

オラアアアア！－！」

迅「大丈夫か？」「

水瑠「迅・・・君」

迅「おい、しつかりしろ！－！」

そこに襲つてくる黒い者たち。

迅「ちくしょう・どうにかならないのかよ。

ああ！－水瑠・・まだ。落ちるなよ。

まだ。みづるうううううううううううううううううううう！」

「んつこれは、？私と迅の体がシンクロする？」

迅「まだだ・・まだ終われない、うああああああああああああああ！」

体育館が黒く光りだす。

そして、迅の動きが早くなる。

迅「おせえ！－！」

黒い物は、全て消える。

迅「この力・・何なんだ？」

「それは、表意です。私と貴方が、表意する。仲間がピンチまたは、自分がピンチの時、

それは、発動されます。最初に目覚めたのは貴方ですね？」

私は、貴方と表意契約を結ばなくてはなりません……」

迅「何が必要なんだ？」

「貴方の血痕です。」

迅「……」

「最初は、戸惑います。ですが」

迅「分かつた」

「えつ？」

迅「分かつたと言った！！ビニの血だ？」

「貴方の血管に流れる血を少しもらいます手を」

俺は、手を出す。

「では、行きますよ？」

釜が振り上げられ。

俺の血管田掛けて。降りてくれる。

て、おい。ちょっと待て！！

迅「それじゃ、手が切り落とされちまつよ……これ使えこれ！」

「これは注射器？」

迅「ああ、それで俺の血を必要な分だけ抜け……」

「了解です」

迅「ざしゅ……」

「シュー！」

「この位です」

迅「よし、契約終了……」

水瑠「幸仁」を助けに行こう。」「

俺は、またエレベーターに乗り。
下駄箱まで降りる。

幸仁「ちつ・・・こいつ。半端じゃない」

芽衣華「はあ・・・はあ・・・そろそろ。」
「りなさいよ。」

幸仁「へへつ・・・何言つてやがる。俺は、しつこいんでね・・・はあ・・・はあ・・・」
「れぐらいじや死なないんだよ。悪いな・・・奥の手だ。」

表意・・・

リバイアス「契約は、すんてるからな。いいだろ。表意!!--」

幸仁（表意）「まだ。負けられないんだよ。俺は。」

芽衣華「なに? 何なの? あれ。」

幸仁（表意）「あああ回復してきたぜ!!--行くぞ?」

芽衣華「はあつ!!--」

幸仁（表意）「・・・おせえな? うらうつ!!--」

俺は、リングで転入生に攻撃。

芽衣華「うああ!!--」

幸仁（表意）「ほらほら・・・もつと叫べよ!!--おんなあ!!--」

芽衣華「さつきと違う?」

迅（表意）「おいおい一人で張り切ることば、ないですよね?」

幸仁「

幸仁（表意）「おお、お前も表意か。」

芽衣華「ふ。2対1なんてなれてるわ」

水瑠「じゃあ、3は、?」

芽衣華「なんですって?」

水瑠「聞かせて。詳しい話」

芽衣華「話すことなんてないよ。皆シネエエエエ!!--」

大剣が三人の前に横から振られる。

それを全員で避ける。

迅（表意）「動きが甘いですね?」

幸仁（表意）「オラア!!--後ろだ!!--さあ、覚悟しなあ!!--」

俺は、体力が減り弱つている彼女に。

リングを上と下から通し。

「一つとも閉める。

「キウツ!」

芽衣華「うんあ……離せ……離せ……」

水瑠「吸い取る……リンルリ」

リンルリ「吸い取るのね……おk」

芽衣華「うあ……うつああああ……力が出ない……」

「バタつ……」

迅「さて、連れてくか」

幸仁「そうだな」

水瑠「賛成……ありがとリンルリ」

リンルリ「いいわ……いつでもっ。」

芽衣華を使われていない教室に連れ込む。

そして、縛る形で拷問。

注意別に、変な意味ではない……

はかせるためだ!! 許してくれ……」

芽衣華「うつ……私をどうするの?」

幸仁「拷問する。」

芽衣華「い、拷問……」

水瑠「さあ……言つて。なんで命令なんて?」

芽衣華「話す必要がある?」

幸仁「リング強……」

芽衣華「うんわああ……」

水瑠「吸い取り強化」

芽衣華「あああああ……」

違う私は、「

幸仁「リング強!!!」

芽衣華「いやああ……」

水瑠「吸い取り強化」

芽衣華「やめてええええ……」

迅「さつさと話せよ!!!! 電氣 強……」

芽衣華「痛い痛いよ……」

迅「さつさと話せよ!!!! 人殺し!!!!」

芽衣華「うつああああああああ！」

体を捩じらせながら。今にも死にそうな顔で。

痛みに耐える芽衣華を見て。

もつと苦しめて。殺したい。苦しめて苦しめて。あいつと同じ目にあわせたい。

そう思つてしまつ。

幸仁「落ち着けよ！――」

迅「落ち着けるか……答えないなら殺す！！！！！」

水野「やめて！！！殺しても意味がない……死んだら意味がないの。

幸仁・抑えてて

迅「てめえ！！離せ！！！」

幸仁「殺しそうだから」

芽衣華「私は、その頃、やんديいてね……」

殺さなきや氣がすまなかつたの。」

迅「人と上手く、『ミコニケーション』がどれねえから。殺そつてか！」

しかも！…女の子を！…」

芽衣華「ええ、あの女が憎かつた。だから殺したのよ。あはは！…」

あははは！…」

迅「てんめえ！…」

それが！人の恋人だと知つて殺したのか！…」

芽衣華「えつ…？恋人？あの子。彼氏がいたの？」

迅「知つたような口きいてんじゃねえ！…」

ああそうだ！…俺は、彼女が本気で好きだつた。

大好きで！…絶対に離さないと思つた。

でも俺は、肝心なときに助けられなかつた。

最低な男だ。でもなつ！…そいつを殺すように命令して、自分で動かずに入を使う方が！…もつと最低なんだよ！…

それがてめえなんだよ！転入生できて仲良くしてやろうと思つたら、これだ！…俺は、これ以上人が死ぬのを見たくねえんだよ！…」

芽衣華「はつ・・私を友達と思つてくれるの？」

「こんな奴でも友達として。付き合つてくれるの？」

迅「当たり前だ。でもな、人を自分の憎しみのために平氣で殺すような友達は、俺は、いらねえ！！」

ここには、友達が一人居る。

信頼できる奴らだ

幸仁「迅・・」

水瑠「迅君・・」

迅「俺は、友達として受け入れてやるよ。
どんな最低な奴でも。どんな馬鹿な奴でも。
本気になれば誰だって！！馬鹿じやなくなる。
だから受け入れてやるんだ！！
ごめんねで繋がる友達、

受け入れてやるよ！！幸仁も水瑠もあんたの含めてな！！！」

芽衣華「ごめんなさい。」

迅「ああ。もういい、」

水瑠「迅君・・」

幸仁「迅！？」

迅「言つたろ？『ごめんねで繋がる』って。だからこれから、よろしくな。

芽衣華

芽衣華「迅・・君」

水瑠「そんなに簡単に許しはあるんだ」

幸仁「それが絆さ・・でも水瑠、お前は、迅の事、
友達じゃない、恋愛の面で、気になつてるんじゃないのか？」

水瑠「びくつ！…づ・・づん。でも。無理。」

幸仁「なんで？」

水野「だつて、彼女が居るじゃない・・」

幸仁「いや、違うぜ。きっと迅は、お前を好きになつたら。昔の彼
女よりも

大切に思つてくれると想つぜ。」

水野
「うん。」
—

放課後戦・決着（後書き）

転人生、迅雷芽衣華は、悲しさから。人殺しに変わってしまう。

だが。それを。迅は、絆と言つ。方法で受け入れたのだ・・・

そろそろ。クリスマス・・・

次回！クリスマス旅行！！

地図に存在しない町、ゴーストシティ。その町は、
何が消えようと。誰が消えようとも。永遠に光を拒絶する。

クリスマス旅行！（前書き）

俺こと。新川迅は、過去に人を殺している。
そして、天界と地獄界の狭間で、
俺は、普通に学生をやっている。
今日は、学校が休みなので。久々にゲームをしていた。

クリスマス旅行！

迅「うわっ！！また見つかったぜ！」

俺は、気楽にスパイゲームを楽しんでいた
やられながら、そろそろクリスマスと言つ事もあり。
ゲームを大量に買いすぎてしまい。

クリスマスイブの夜に朝までかけて。

一つゲームをクリアしようと囁く馬鹿な作戦。
試しにプレイしたゲームが。

スパイゲーム「スパイリッド」である。
このゲームは、様々なゲーマたちが。
予約満員の中で手に入れたものである。
そこでは、スパイリッド戦争があつた。
だがそこに水瑠。（あのネクラ）が居たのがいさか気になる所で
ある。

迅「よっしゃ！」

「んつ？ぬおおおー！」

迅「おいおい！また足吹つ飛びますよ。クレイモアかよー！
ちくしょうー！」

嫌になつてリセットボタンをポチつ···

はあ···なにか楽しいことは、ないのか？

迅「俺に楽しみくれええええええーー！」
家の中で叫ぶと。

「フルルルルル！」

普段ならないはずの。電話が忙しなくうるる。

俺は、少し不機嫌に。今ゲーム中なんだよー！負けたばっかだよー！
ゲームオーバー何回目だよー！的な雰囲気の声で
電話に出る

迅「もしもし？」

水瑠「今日、学校」

迅「えつ？休みじやねえの？」

水野「今日は、クリスマス旅行の打ち合わせ」

そういう事で、運営がなくなりました。

「ガシャンと切る」

水野「全員強制參

「ガシャン」

「フルルルルルウル」

迅「はあ？」

水野「持ち物、筆箱」

「ガシャン」

「ブルルルルルルルル」

近、なんだ、二、三、て、んだよ、おおおおおおおお！ したす、ですか？

「一回の電話で金額伝へやたれ。」

本居宣長全集

近「かづ」こと

俺は、不機嫌で着替える。

「ブルルル」

迅「なんだよ！！」

宅急便です

「ガノヤー、
迅一 賴んでねえ」

不幾兼で登校、

不機嫌でせきつき。

すると教室がクリスマスでにぎわう。

芽衣華「迅くうーん」

そう、彼女は、芽衣華

そう、彼女は、芽衣華

「どうやら、幸仁も水瑠もこるりっこ。」

芽衣華「はいこれ。」

迅「なにこれ？えつ？ロレックスの腕時計……」

幸仁「じんくううううううん」

迅「はあ？」

幸仁「迅君だいす、ぐほあ……」

俺は、後ろから飛んでくる。幸仁に裏券をきます。

幸仁「殴ることは、ないだろ？ ほい。プレゼント。アンパン」

迅「何これ？」

幸仁「ティッシュ」

迅「顔面蹴り！？」

幸仁「ぐまじり……わかつたよじやあいれはせ？」

迅「何これ？」

幸仁「金のうさん」

迅「うねりう……右ストレーテー……」

幸仁「ぎゅう……じや、じやあこね。」

迅「なんだこれ？」

幸仁「萌えキヤリ真ヒロアニメ録画せつ」

迅「おらおらおらおら……」

幸仁「がふ、ぎゅふぐおおお……ならば」ねは、どうだ……

おふくろの味、食にかけポテチと飲みかナロー！」

迅「踵落とし……つうかよくそんなもんとつといたな……」

何日ほつとこたんだよ……「一ラだつて。炭酸抜けただの砂糖みず
じやねえかこのやうお……」

幸仁「もつたいないから2年ほつといた。」

迅「一年もほつといて普通にイブにあげられる貴方の心がびっくり
だよ！ だいたい。

てめえの財布の中いくらだいのやうお……満足に菓子もジュースも
かえねえのかよ……」

幸仁「迅……お前に上げようつと應ひて。一年間、机の中こ

「い！」道の駅「おおむら」二ノ井町
「おおむら」二ノ井町

幸仁「だって、何でも受け入れてくれるんだろう?」

俺は、あの時言った言葉に後悔する。

しつかりと伝わつていないようだ。

迅「そう言う意味で言つてねえー

なんか誰が受け入れるんだよ！！

幸仁「俺（キラン）」

迅「お前、おかしいだろ、しかも妙に輝いてるし輝くなよ。そんな

「アーティスト」

幸仁「ならば・・これを出すしかないな。」

迅「な、なんだと？」

幸仁「ふふふ・・・まだまだ甘いのだよ。君は、

バナナの皮とみかんの皮。

「ブチッ

迅「あ、あ、みくもっけてきててくれたな。じゃあ、お疲れ様。ドロップ

キック!!

飛んでナ！！

幸仁「うわああ

用「手は繩づいた二二の手は片體」

お留「庄助、どうも：ちよつと相談があるので……ですか？」

「ああ、——ナビ——」

「アサヒ」シテアサヒナガバ

「アーヴィング」

幸一「うつああああ

アラビア語の書籍一覧

迅「ああ、」

水野「宜しければ・その。私と組んでくれません?」

ア
ア

高感度は、俺のもの！――！――！――！――！――！――！――！

迅「ああ、全然OKだよ。

水野「ありがとうございます」

幸仁「俺、ほつたらかしかよ！！」

迅「お前は、一人でいいだろ。な? 水野」

水野「そうね・・うふ・

俺に体当たりを可憐くしてくる水野、

俺の将来は、決まつたぜ。

ここから始まる。水野をするにする作戦！！

略して。フラグ成立。高感度もらつたぜ作戦！――

幸仁「はあ・俺は、一人か」

芽衣華「大丈夫? ねえねえ、私と組もうよ。」

幸仁「おk。分かつたよ」

ヰタアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア

ア
ア

俺の春がキタアアアアアアアアアアアアアア

芽衣華「あらしょー」ちゃん、あ、間違えちゃつた

乾杯です。

卷之三

先生さあ、明日から三日までのスケジュール旅行は二万円

アーティスト

「おまえが『おまえの約束』を守らなかったんだから、おまえの約束を守らなければいけないんだよ。」

生徒にはお・・・芽衣華かよかうたあ! 僕は水野かた・・・」

つきりだ。

水野と組めた俺勝ち!!!――勝ち組ばいざ――、――

水野文庫

が云ふ。左の如きは、必ずしも

水野「あの . . .

迅「なんだ?」

水野「明日20日から . . よろしくね。」

迅「ああ、任せろ」

芽衣華「明日の夜、芽衣華寂しがりやだから、一緒に寝よっねえ?いいでしょ?」

だ・め?」

上田遣い。俺の弱点! ! !

幸仁「ああ、良いよ」

やつた . . . 迅君と二人、

やつた。幸仁君 . . 私の攻撃に一ころだ!

ごみども(生徒)「リア獸撲滅う~ああ~」

俺には、生徒がゾンビのよう見えた。

やはり。もてない者の執念は、怖すぎる。
教室は、そのゾンビの黒い執念をよそに。
ハッピーな雰囲気が流れてるとことと分かれた。

クリスマス旅行！（後書き）

クリスマス旅行のグループが決まる。
はしゃぐ。迅、そして、幸仁。

そして、もてないゴミたち・・・（どんまいです）

だが、水野からのプレゼントとは？

地図に存在しない町。ゴーストシティ。そこには、
もてない者と運の良い者。

なにがあろうとも。迅達は、もてない者の執念を拒絶する。
あれ？間違えた？ま、いつか

クリスマス旅行 到着（前書き）

俺こと、新川　迅は、クリスマス旅行と言つ名の。行事に強制参加させられていた。20日から、24までクリスマス旅行だ。

だが、本当に今日は、2日なのか？

クリスマス旅行 到着。

迅「うわあ . . 集合はやつ！」

現在時刻、午前4時。

俺は、無理やり眠い目をこじ開け。

無理やり。着替えをし。

嫌々と、学校に着き。

集合早すぎだろ！と愚痴をはき捨てていた。

そこへ、

水瑠「おはよう . . 迅」

ミス ネクラがやってくる。

朝の挨拶からして、暗いのである。

そして . .

幸仁「じんぐーん！ . . . ！」

迅「うわ~昨日のドロップキックで火星まで飛ばしたはずの、幸仁
がなぜここに？」

ドロップキック？とてなが付く人は、
この前の会を読むことをおすすめする。

芽衣華「幸仁君 . . どうして？」

幸仁「えつ。ああ、一緒に来る約束か。悪い、」

芽衣華「まあいいよ。」

先生「やあ . . 皆、出発の準備は、いいですか？」

俺は、あの先生に「ちょっとここ」とアイコンタクトをし、
こちらに呼ぶ。

そして、聞くのだ先生のボケさを。

迅「先生20日って、言ったよな？」

先生「そうだが . .

迅「先生、日付見てください」

先生「あ。」

先生「いやいや、『めん』『めん』。実は、良く見てなくてね。でも確かに出発は、今日だよ。」

と、先生のボケを聞き。

場所にとつ着、

先生、一部屋割りはこうだ
質問、いるか？」

質問
いなか
」

先生「なんだ? 迅」

迅「先生つて……田付は、忘れるのに。」
部屋割りはなぜか覚えてるんですねー

先生「う・・ま、まあな。では、各自部屋に行け！」

俺と、ネクいや。水瑠の部屋は、ここだ。

迅「そうだな。

そして、部屋割りは、一人ペアだ。

幸仁「おお、ここが部屋か！」

ミー（ボソ）　　英語表記：MEE-ee (BO-SO)

幸仁「そうだな、夜中が。」

ここで！ここで！俺は、女子と一人だ！！しかも転人生と！！

迅「水瑠?何してるんだ?」

水瑠「えつ？う、いや・・なんでもない。」

顔は、なんでもなさそうな。リンゴのような赤い顔だ。

お願い」とか「」とか言わないで……

水野「迅君」

迅「なんだ？」

水野「この部屋、すごい広いね。ようじく
アウトっ！」

水野「真っ赤 . . .」

迅「お前もだろ . . .」

もしかしていい感じ？

幸仁「あ、芽衣華」

芽衣華「うえ／＼／＼？」

幸仁「ごみ。付いてたぞ。」

俺は、笑顔で言う。

芽衣華「ありがと」

芽衣華の顔が「かあああ」っと赤くなっている。

迅「つうか。今日はもう。消灯らしいな」

水瑠「なんだ」

もう消灯 . . .

二人で寝る . . .

はつ。私、何を考えているの？

迅「電気、消すぞ？」

俺は、電気を消し。布団に先に入る。

「パチっ」

水野も入ってくる。

迅「あつ . . .」

背中がぶつかる。

すると。

「シユル」

水瑠が向きを変えた？！早い早いまだ早いぞ！――！

幸仁「あ、そういうえばもう消灯だった。電気消すよ？」

芽衣華「う、うん」

「パチっ」

芽衣華「. . . みやあ」

幸仁「えつ？」

芽衣華「寂しがりやつて、言つたでしょ？だから、猫みたいに甘え
る。みやあ・・・」

幸仁「お、おお」

なんだらつ・・・？初めてすぎて緊張する・・・

水瑠「寒いので。抱き枕にしても・・いい？」

迅「勝手にしろよ」

俺は、まともに彼女の暖かさが伝わる。

余計な緊張だ。

このまま、楽しくいければ良いけどな。

クリスマス旅行 到着。（後書き）

旅行場所に到着、

そして、密着する生徒、

そして、もてないで寂しく一人で眠る生徒。

悲しみである。

そんな中・・事件が起こる。

クリスマスプレゼント（前書き）

俺は、喉が渴き。
おきだし、水を飲みに行く。
そして、部屋に帰り。
水瑠と雪を見ていた。
悲劇がおこる . .
遅れてくる。生徒、
俺は、また。

クリスマスプレゼント

朝 4：00 時。

おれは今朝である。

俺こと、新川迅は、喉が渇き

おきたし 水道に行く

「うんあああ！！まだ早朝すぎるじやねえかああああ
俺は、喉の渴きと誓つ。とんでもない悪魔に起しきれるのだ。
そして、とぼとぼと水道を探しに出かける。

迅「水道・水道つと。あ、これこれー。
あれかひ、なんざかんざ」とあり。

今日は、
20日だ。

近江道
刀道

うん。これは、普通、問題は、次からか。

おいおい、嫌だ世?はるはるクリスマス旅行に来て

ପାତ୍ରବିନ୍ଦୁ

飲む。

କବିତା - "ମୁଖ୍ୟମନ୍ତ୍ର"

次ぎ次
辻一
んつ
? 炭酸飲料?
しかも、
ナーラ?
えつ?
なん
で?

卷之三

蛇口をひねる。

迅「なぜ? 水道にGが?」アキラ: ブリと壁の懸念

次々――

迅「うおえつ！…しょつぱ！…完全に塩水かよ…」じちとら喉かわ

ん？ 5つ目？ なんだこれ？ なんか紫だな？ グレープか？」「飲む。

迅「づつ！…」この味は、グレープなどと言ひ優しいものじやない・・どく・・水・・だ」

一
ハタツ

DEAD

主人公が死んだのでは再也りません。

三才一編

そう俺は、一日の半分を、

部屋の布団の上で過したのだ。

迅「あ、ああ。問題ない。俺は、風呂に入る」

水瑠 うん

「ふう、何でだ?」この蛇「おかしいだろ、完全こ。まあ、ありなのか?」

そう思いながら、浸かっていると。

通すい。すで通じる。出る。うん。

俺は、そのまま。部屋にでもね。

水瑠「おかげり。どうする？ 私？」

近・雪隠にてんこへシタ出ゆはれ

俺は、
戸惑いを隠せない。水瑠に手を貸す。

幸仁「ふう・・・さむ。雪かよ」

俺は俺で寒さに凍えていた

幸仁「でしゃうね・

芽衣華「あたためて？」

幸仁「えつ？」

芽衣華「ねえ・ダメ?」

指を口にあて、俺を誘うよつなそのじぐわせ、なんだ！

幸仁「ダメつて・・事は、」

その時始める工事

俺は、その一言で嫌な予感がした。

セイリョウノシテ

三三「一指」

生徒一階で、み 旨か!! 血を流して倒れる!!!! あの傷力
らみて、殺されてる。

いま。Iの旅館には、黒

「人間が如何なる人か」

幸仁「早く！！緊急放送しろ！！！あいつらが死ぬ！！」

生徒「了解！」

近いヤニ長いシソの言がな
ハナガ瑞

迅「なんだ？」

水野一私
・
・
私

二の辯聞く所が多

そして、
飛びつかれる。

迅「お、おい！」

方野和モニ隠せなし

水野「迅
貴方が
好き。」

迅
え
つ
・
・

水野「ごめんなさいいきなり。」

迅「先に言われちまつたな . . .」

水野「えつ . . . ?」

迅「俺から、言おうと思つたのにな。ははつ、駄目だな」

水瑠「ありがとう . . . 雪、」

迅「綺麗だよな . . .」

水野「クリスマスプレゼント . . . だね」

迅「上手い事言つな

その瞬間だ . . .

一瞬だ。

目の前で告白した水野が . . .

「グサツ！」

水野「. . . !！」

「あーごめん。邪魔だから、刺しちゃつた。」

水野の腹に、鋭い刃が刺さつている。

「バタツ」

水野が倒れる。

迅「おい！！大丈夫か？おい！！」

「あ . . . 死んだか。悪いね。じゃあ、」

迅「てんめえ . . . いきなり何しやがる！ . . .」

「だつて . . . 」。今日、俺達が取りに来た。

迅「てんめえ！」

「てめえじゃない . . . 僕は、しらかわ白河みづる美鶴

迅「目的はなんだよ！ . . .」

「12月24日 . . . イブの夜に、ここにとまつてる。奴らを全員殺

す！！

それが目的だ . . .

にしても久しぶりだな？新川 迅 . . .

迅「なんで知つてる？」

「気づかないような教えてやる . . . あの時、なんで、芽衣華が全てを話さなかつた？」

幸仁「は、なぜ？命令されていた？」

迅「まさか……」

美鶴「そう……おれがあの二人を使つた。いい道具だつた。俺は、それを……取り戻しに来ただけだ。」

迅「てめえ……また命令して動かすのか？」

美鶴「違う……今度は、素材として使わせてもらう……もう。動き出してるんだよ？全て。」

その言葉の意味は、理解できなかつたが……嫌な感じがした。

クリスマスだけじゃないらしい。

そんな違和感が俺を襲う。

美鶴「さて……行くか？ジグリス」

ジグリス「俺は、余計な折衝に興味など……」

美鶴「仕方ない……死ね。」

ジグリス「なに？」

迅「なんでそう簡単に、仲間を落とせるんだ！！

そいつだつて仲間だろ？」

美鶴「仲間？悪靈は、道具にしかすぎない……」

ジグリス「あああああ！」

美鶴「だつて、俺自体が悪靈だから、『一つ言つ』とも可能なんだよ！！！」

俺の背中から、無理やり引き離される、感じがする。

リーン「ぐつ……うわあ！！貴様！！何を……」

美鶴「ははは……君を俺の物にする……」

リーン「やめ……て……う。ああ……」

・・・美鶴は、私の主人……どうしますか？」

美鶴「今は、ほおつておけ。行くぞ」

リーン「はい……」

そいつらは、俺の前から消える。
リーンをもつて。

リーン「はい。」

美鶴（表意）「さて……やるか。
まずは、真正面から、突撃だ。」

迅「……」

俺は、ジャンプで避ける。

美鶴（表意）「なんだと？上？」

迅「行け……刃……ティフォウムマキネス」

刃が光りながら、

美鶴の頭の上から刺さる。

「ぐうわあ！！」

「貴方だけで楽しまないでくれる？ねえ？ティル。」

ティル「まつたく……ありえない。」

迅「お前は、？」

「私は、城川由美なんかさ、平和に終わると思つたけど。そうは、いかなそうね？なんか知らないけどさ。全校生徒に、緊急放送だよね？」

私は、FRクラス。貴方のクラスの下ね。」

俺は、AWクラスだ。

まさかその下にもあつたなんて。

俺は、思わなかつた。

だが思うのは、今度こそ。この子だけは、守る……
そう決めていた。

美鶴「すきあり……なに？」

由美「後ろから？ちよつと……ちよつと。それずるいんじゃない？」

本気出すよ？

いくよつティル

ティル「ああ、」

由美「さて……食らえ。腕が吹つ飛ぶかもだけど……別にいいよね
？うふっ」

美鶴「なんだ？かぜ？」

「シユン グシャリ」

美鶴「腕が！！貴様ら！！！」

迅「おつと…右足もなくすかあ？」

美鶴「ちつ…ぬつ！！」

俺は、地面に美鶴をたたきつける。

ありつけの怒りを込めて。

迅「わあて…そろそろ終わりだな？」

美鶴「くつ…上？」

上から、光の閃光が俺を貫く…

美鶴「ぐはあ！！」

俺は、これ以上追い回しても

危険とみなし。

逃げる事にした。

勝負は、後だな…新川迅。

迅「てめえ！！逃げんのか！！：

由美「深追いは危険よ。ありがとう…ティル。」

ティル「またな…」

迅「よろしくな…リーンネイクティス…それと。ありがとうございます。」

由美。」

由美「うん。よろしく。無理は、しないでね。」

つづく

クリスマスプレゼント（後書き）

水瑠は、殺され、リーンは、美鶴に奪われる。
せつかくのクリスマスが台無しもいいところだ。

だが。敵がふえた事は事実、そして、命令していた。指令人も見つけた。

水瑠を亡くした迅、だが次こそ。由美を守り抜こうと決意したのだった。

次回、イブの夜、

地図に存在しない町、「ゴーストシティ」。その町は、何が消えよう、
誰が死のうと。永遠に光を拒絶する。
ゴーストシティ。次回もお楽しみに。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6358y/>

ghosta city ((ゴーストシティ))

2011年11月25日18時51分発行